第一章　叙法概說

1. Mood. 英文法に用ふる Mood といふ語は、拉丁語の modus (="manner," cf. Gk. *μῆδος*, "plan," or "scheme") から來たものであると言つて差支へは無いが、拉丁文法では又別に status (="state"), qualitas (="quality") 等の名稱が同じ場合に用ひられたこともあるので、その元來の意義が那邊にあつたかは必しも明瞭でない。然しながら、二世紀に於ける Alexandria の文法家 Apollonius Dyscolus が同樣の場合に關して、それは *ψυχικαὶ διαθέσεις*, 卽ち "attitudes of mind" を表はすものであるといふ解說を下して居ること等を思ひ合はせると、或は此名も亦同樣の意味で與へられたものであるかも知れない。但、嚴密に言ふと、英語の Mood は此 modus の單純なる直系ではなく、それに古代英語の mōd, 卽ち "mind" 又は "heart," "feeling" 等を意味し、又、"frame of mind," "state of feeling" 等の意にも用ひられた語[1] (cf. Ger.

(1) Cf. him wæs geōmor sefa, / murnende *mōd* (=their mind was sad, mournful their heart).—*Beowulf*, 49–50; þā his *mōd* āhlōg (=then his mind laughed).—*ibid.*, 730; hāles *mōdes* (=in his right mind).—*Mark*, v. 15; Til at the laste aslaked was his *mood*.—Chaucer, *The Canterbury Tales*, A 1760.

mut<O. H. G. *muot*)が合流雜糅して出來たもので、此場合甚だ面白い名稱であると考へる。蓋し、文法上に言ふ Mood なるものは、元來吾々が動詞の力を借りて何等かの陳述をなす時、その陳述せらるゝ事柄が吾々の腦裡に於いて如何に感ぜられ、如何に見られて居るかを、或程度まで區別して表示するものであるからである。尤もその定義を下すことは、殆んど凡てのものゝ定義を下す場合と同樣に、固より容易の業ではない。Sweet が

> By the moods of a verb we understand grammatical forms expressing different relations between subject and predicate.
>
> —*A New English Grammar*, Pt. I, p. 105 (§293).
>
> (動詞の叙法と言へば吾々は主語と述語との間の種々異りたる關係を表はす文法上の形態なりと了解する)

と言つたのは Jespersen の言つた通り不明の說で、此丁抹の學者の

> It is more correct to say that they express certain attitudes of the mind of the speaker towards the contents of the sentence.
>
> —*The Philosophy of Grammar*, p. 313.
>
> (叙法は文の內容に對する言者の心的態度を表はすものだと言つた方が一層正確である)

といふ說の方が正しい。米國の學者 Curme は

Moods are the changes in the form of the verb to show the various ways in which the action or state is thought of by the speaker.

—*College English Grammar*, p. 55.

(叙法は動作乃至狀態が言者の思想内に於いて描かるゝ模樣の差異を示す爲に動詞が採る變化である)

と言ひ、又、その新著では

Mood is a grammatical form denoting the style or manner of predication.—*Syntax*, p. 389.

(叙法とは陳述の樣式を示す文法上の形態である)

と說いて居る。何れも要を得た定義であると考へて差支へが無いが、その實際上の解釋に就いては後に說くことゝする。

2. 二つの世界. 吾々は生を具象の世界に營み、己の感覺に訴へてその中に現はるゝ諸の事象を觀、必要に應じてその觀るところを言語に寫して發表する。

Dogs *run*. (犬走る)
Stars *twinkle*. (星が煌く)

の如きはその最も簡單にして且卑近な例である。又、例へば棚から下る葡萄の總房の、紫碧滴るが如く、夕陽に種子の見えすく風情を見て、そのよく熟したるを知り、

Those grapes *are* ripe. (あの葡萄は熟して居る)

と言つたならば、これ正に吾々が具象の世界に看た事實と觀ずる事柄を、その觀ずるがまゝに事實として言語に發表したものである。然るに吾々が生存する世界は、啻に斯の如き事實現象のみに成立つ具象の世界ばかりではなく、そこに吾々の經驗が呼び起す別箇の世界がある。それは吾々の心の世界である。例へば、上記の葡萄の例の場合に於いて

I *will eat* them. (あれを喰べよう)

と言つたとせよ。其場合に於ける will eat は正しく此心の世界の消息を傳ふるものである。さりながら此 will eat は吾々自身の心の世界に躍動する意思を、その動くがまゝの姿に於いて寫すものであるが故に、そこに發表せらるゝ思想の形態は Those grapes are ripe の場合に於けると、結果に於いては相距ること があまり遠くないと言つても差支へは無い。然しながら、吾々の心の世界の消息は常に必しも斯の如きものばかりではない。そこからは屢事實とは相距ること の遠い想像又は空想の聲が聞えて來る。例へば、上記の如き場合に

Were they sour, I *would* not *eat* them.
(酸つぱければ喰べない)

と言つたならば、それは全く想像の聲である。文法

上の原則的解釋によれば、斯の如く、陳述せらるゝ事柄の、言者の心中に於ける影象樣式の異るにつれて、言ひ換へれば其事柄が、言者の腦裡に於いて如何に見らるゝかに從つて、これを發表するに用ふる言語の動詞に現はるゝ區別を、其動詞の Mood の區別といふのである。此 mood なる語を如何に邦譯すべきか。從來「法」と稱へられて來たが、どうもあまり適當なる譯語とは考へられない。然しながら、此語は既に久しき間殆んど凡ての人に用ひられて居るが故に、私はこれを尊重することゝし、只一字を加へて『叙法』と名附けることにする。

3. 言語の變遷. こゝに注意すべき事は、印歐語の古き時代に於いては、斯の如き區別が可なり精密に動詞そのものゝ形態に現はれて居た[1]のであるが、歷史時代に於いては、殆んど何れの國語に於いても此間の區別が徹底を缺き、時代の經るにつれて益語形上の差別が失はれ來り、國語によつて程度の差こ

(1) 尤も非常に古い時代の言語に於いては、後にも若干言ふ樣に精密と言ふよりも寧ろ複雜であつたと言つた方が眞に近く思はれる。又、比較的後代の言語に於いても上に述べた樣に區別された小目内に於ける表現は精密でなく、却つて空漠である。卽ちこゝに言ふ精密とは普通吾々が古代語と稱する、例へば拉丁、希臘の古典語乃至古代英語等に於いて「實」(fact) と「想」(fancy) との區別の表示に就いての概說たるに止まるのである。

そあれ、近世の言語に於いては、同一の語形が異つた姿の思想を表はすのに用ひらるゝこと見られる場合が頗る多いといふ動かすべからざる事實である。英語の如きは此種の變遷の最も甚しかつた國語であるが、然し、古代英語に於けるが如き語形上の區別が衰頽したこの理由で、現代の英語に於ける叙法の區別の存在を過少視する樣なことがあつてはならない。蓋し、現代の英語に於いては、叙法の區別を以て單に、單一なる語形上の區別なりと考へたり、又はそれに依つてのみ表示せらるゝ思想樣式の區別なりと見たりするのは、全然妥當を缺く見解であつて、少しでも其言語に此間の消息を傳ふる語形上の區別が殘存し (*e.g.* "He *come*" vs. "He *comes*"; "as it *were*" vs. "as it *was*," etc.)、又、それに代る新語法の發展があり (*e.g.* "It *would be* well" for "It *were* well," etc.)、尙、前後の關係、特殊の配語法、又は語調等に依つて、その昔語形の變化に依つて表示せられ、又、今尙或場合には表示せられて居るのと同樣の思想的區別が明示せらるゝ限り、吾々、言語の生命をその歷史的脈絡と音聲に依る表現との上に認むるものはそこに叙法の區別の存在を認めざるを得ないのである。例へば

I *did go* there yesterday.
(僕は昨日あそこへ行つたんだよ)
Did I *go* there now, I might see him.
(今僕があそこへ行けば、彼に會へるかも知れない)

You *speak* too fast.
(君はあんまり早くしやべり過ぎる)
Speak more slowly. (もつとゆつくり言つてくれ)

の如き二組の場合に於いて、その用ひられて居る動詞の形態には何等の差異が無いが、各組の兩者の間には明かに思想的差別が存在し、文法的用法を異にし、音調上の相違があり、又、言語の歴史は明かにその表現上の相違と思想的差別との間の關係を指示してくれるのである。此事は各組の第二の文を "If I *did go*..."; "You *speak* more slowly" としても全く同樣である。若し、眼で見た語形上の區別が無いといふだけの理由で、此間に叙法の區別を認めないと言ふならば、deer, sheep 等には數の區別なく、cut, put 等には "Past Tense" が無いと言はなければならないであらう。吾々の文法は言語のありのまゝなる認識の上に立つ。故に言語が全然その性質を更め、その形狀を變へてしまふならば、吾々は誰よりも先んじて前說を廢棄し、新說を採用若しくは樹立するだけの用意を有する。然しながら、言語が全然その本質を變ずることは恐らく稀有の事で、例へば驚くべき位

變遷の甚しかつた英語が、今日尙、屈折語たるその性質を失はない樣なものである。然るを深く思はずして現代の英語に叙法の區別を認むるに吝かなるが如きは、その可なる所以を知らない。

4. Jespersen と Sonnenschein. 當代の文法學者の中で Jespersen は "form" 尊重論者で、氏は叙法に關して

> Further it is very important to remember that we speak of "mood" only if this attitude of mind is shown in the form of the verb: mood thus is a syntactic, not a notional category.
>
> —*The Philosophy of Grammar*, p. 313.
>
> (それから、吾々が叙法といふことを言ふ時は、此心的態度が動詞の形態に於いて示されて居る場合に限ることを記憶することが極めて肝要である。かくて叙法なるものは文法的のものであつて概念的のものではないのである)

と論じて居る。叙法の區別が文法論中のもので、概念論上のものでないことは當然過ぎる程當然の事であるが、私は未だ全局的には此說に服しかねる。Jespersen の學敵 Sonnenschein の考は餘程私の考に近い樣で、氏は

> Moods and tenses may be defined as *collections of verb-forms (simple or compound) used, or capable of being used, in indicating particular groups of aspects of the verbal activity in sentences.* The verb-form need not be *distinctive* of the aspects; for form is only one of

the agencies whereby distinctions of meaning in moods and tenses, as in cases, are indicated.

—*The Soul of Grammar*, p. 54.

(叙法並に時制は文中に於ける動詞活動[註曰。動詞活動とは平常語で言はゞ動作又は狀態といふ事と考へて良い]の姿の夫々格別なる類型群を表はす爲に用ひられ、又は用ひられ得る動詞語形(それは單形でも複形でも良い)の集まりであると定義することが出來る。動詞語形は必しもその姿の區別を一々明示するものたることを要しない。蓋し、語形なるものは、名詞・代名詞の格に於けると同樣に、叙法及び時制の場合に於いても意味の區別を表はす手段の一つに過ぎないのである)

と言つて居る。Jespersenは此說に關してゞはないが、機會のある每に Sonnenschein の說を攻擊し、口を極めてその不徹底を難んじ、その矛盾を責めて居る。成程 Sonnenschein の說にも不備の點は多く、再吟味を要する箇所も尠くはないが、Jespersen の說にも不徹底もあり、矛盾もある。例へば、氏は "form" を高調しつゝも、尙 Imperative Mood を認めて居る。然らば氏の所謂 "form" とは果して如何なる內容を有するものであらうか。勿論、氏は *The Philosophy of Grammar*, p. 50 に於いて、氏の所謂 form なるものは "form-words" 及び "word-position" を含むものであると斷つて居るが故に "*Speak*" や "*Speak* you" の類が Im-

perative Mood であると言ふに差支へはあるまいが、然らば "Now you *speak* first" は何物であると言ふべきであらうか。[1] Sonnenschein が古典語との比較を以て闡明乃至說明の助けとして居る點には、Jespersen の所謂 educational fallacy (*The Philosophy of Grammar*, p. 316, footnote) が含まれて居るとしても、吾々が "*May* he *come!*"; "that he *may come*"; "if he *should come*"; "he *would come*, if....." 等を come の Subjunctives 又は Subjunctive-Equivalents であると說くことに關して

> Scholars would hardly have used these expressions if they had had only the English language to deal with.—*The Philosophy of Grammar*, p. 315.
>
> (學者にして若し英語ばかりを取扱ふのであつたとするならば斯の如き名稱を用ふることは先づ無かつたであらう)

といふ氏の議論は果して妥當であるであらうか。私は英語の歷史を知る(勿論淺學ではあるが)が故に、又、言語の現狀を說く上にはその歷史が極めて大切であつて、嚴密に言ふならば、その歷史をよそにしてこ

(1) Jespersen は 1924 年に發表した此說の不備を感じてか、1926 年に至つて雜誌 *Englische Studien*, Vol. LX, p. 301 に於いて "Ton" (語調) を此 "form" の中に追加して居る。言語の生命が口語にあることを力說高調する氏が語調の重要性を除外して居たことは全く不思議であるが、兎に角これは氏の一進步である。されば私の當面の批評は差控へたいのが私の眞意であるが、尙かく言ふ必要を我が國の學界に認めるのを遺憾とする。

れを說くことは極めて危險であり、且、その歷史を參照して說くのが最も妥當適切であると信ずるが故に、卽ちJespersenの標語たる"on historical principles"といふことを徹底させんと欲するが故に、これ等の句動詞(Phrase Verb)を時ありてSubjunctive-Equivalentsなりと說くことを可なりと觀るものである。何故かなれば、これ等は何れも古き時代の英語のSubjunctivesに代るもので、そこに近代的に分析せられた意味の添加はあるとしても、尙、その主要なる職能は古き時代のSubjunctivesの持つて居た職能であり、その意義の表示方を繼承するものであるからである。私として不完全ながら他の外國語と、更に進んでは我が國語との比較若しくは對照研究をするが、決してこれによつて動かさるゝものではない。

5. Deutschbein. 今一つ注意すべきは心理學者Wilhelm Wundtの流を汲む學者の說で、それに依れば叙法は全然概念論的に說かれるのである。例へば獨逸の學者Deutschbeinの如きは

> Der Modus drückt ein deutliches Beziehungsverhältnis in dem Bewusstsein des Sprechenden aus, und zwar handelt es sich um die Beziehung des Gedachten, Gewünschten, Gewollten, Erwarteten zur Wirklichkeit, bez. zur Realisierungsmöglichkeit.
>
> —*System der neuenglischen Syntax*, s. 113.

(=The mood expresses a clear relation in the consciousness of the speaker, and that involves the relationship of what is thought, desired, wanted, expected to actuality, or to the possibility of realization)

と説き、先づ

I. Kogitativus (=Cogitative)
II. Optativus (=Optative)
III. Voluntativus (=Voluntative)
IV. Expektativus (=Expectative)

の四綱[1]を設け、更にその各を四目に分ち、都合十六種の叙法を立てゝ居る。此方法に依れば

May I go?

は Permissive Mood と名附けらるゝものであり、

I ought to go.

は Unreal Voluntative Mood と稱すべく、

You must go.

は Intensified Voluntative Mood であり、

He is sure to go.

は Expectative Mood であるといふ様な工合になるのである。此見方は曾て Sweet も一顧を與へたところ

(1) 此四綱は夫々上説の (1) of what is thought (des Gedachten), (2) of what is desired (des Gewünschten), (3) of what is wanted (des Gewollten), (4) of what is expected (des Erwarteten) に該當するものである。

で、彼は Compulsive, Permissive の名の下に "is to come"; "may come" の如きを分列して居る (*A New English Grammar*, Pt. II, p. 115, §2297 ff.)。勿論、斯の如きも一見方であり、且又、異つた言語の比較若しくは對照研究をなす場合には極めて有益であるが、然し、一國語の動詞といふものを研究の對象とした場合に於いて、これを觀察の基礎に置くことは不適當であると言はなければならない。況んや斯の如き心理的分析は、これを押進めて行つたならば、到底斯の如く十六種位に局限し得ないことになるであらう。

6. 近世英語に於ける叙法の區別. こゝに於いて私の觀る近世英語の動詞の叙法とは、これを英語の歴史的事實に鑑み、旁、印歐語の歴史をも觀察し、又、他の近世歐洲語に現はれたる事實をも參酌し、英語が歴史時代に於いて、語形上、上述の如き意義の區別を表示して居たものだけ、且その全部に就いて、今は其語形上の區別の喪失したものでも、苟しくもその實際の使ひざま(此場合には配語法と音調がその主要條件である)か、若しくは前後の關係に依つて、意義上、上記の如き差別の現はれて居る時、そこに叙法の區別を認めるべしといふのである。論者或は斯の如くんば語形上の標準と、意義職能上の標準と

を明確に區別しないと言つて非難するかも知れない。然し、吾々は自然語 (natural language) を取扱つて居るのであつて、此種の言語は、元來主として自然の勢に從つて發達變成し來つたもので、人造語(artificial language)の如く理論の上に打立てられたものでないが故に、此種の區別が明確に立たないのが蓋し自然の數である。されば言語を說くものは、それをそのありのまゝの姿に觀て、それをそのありのまゝの姿に說き、複雜錯綜の裡に沒入して、尙、その全體の見透しを得、以て不安なきに至るを以て理想とすべきである。言語の實際を離れて徒に理論を上下するが如きは、我が言語學の仕事ではない。